OPINION
オピニオン・スライス
SLICE

東京弁護士会・元最高裁判所判事
山浦善樹弁護士
with
小原正敏会長

マチ弁から最高裁判事へ

小原　どんな学生さんでしたか。

山浦　子どもの頃から人と話をするのが苦手で、いつも一人で絵を描いたりしていた。そんな性格を直したいと思ったが運動は嫌いなので、中学校では学校新聞の委員長に手をあげ、高校では生徒会長もやった。でも性格は直りません。これは70歳になっても変わりませんね。

小原　なぜ法学部に行こうと思われたのですか。

山浦　法律には関心がなく、学部はどこでもよかった。長野県でしたから、碓氷峠を越えて行かないことには一人前になれない、だから東京に出ることが目的だった。

小原　学生時代に興味を持って勉強なさった法律分野はありますか。

山浦　いいえ、法律には興味がなかったので、教科書も買わず、授業にも出なかった。二十歳そこそこで、法律の本を読んで条文や判例に線を引いて覚えること以外にやることがたくさんあった。あの頃は「法律勉強適齢期」でなかったのです。

小原　でも、卒論もありますよね。

山浦　卒論は「法律学懐疑論」というタイトルで、法律は嘘の学問であると。本当は人生観・価値観で結論を出すんだけれど、理屈をつけてもっともらしくする学問を法律というのだと私は看破（？）

その時に、手を挙げる。一歩…半歩でもいいからひたすら前に…

しましたね。

小原　かなり個性的な法学部生ですね。

山浦　そうですね。でも、法学部では変わり者でしたが、あの頃は試験や就職のための勉強より、歴史、哲学、さらには文学、芸術の方がおもしろく、既成の枠を超えたいという気持ちでした。卒論の基本にある考え方は70歳になっても同じです。

小原　その先生が司法試験を目指そうと思われたのは。

山浦　当時は卒業すれば誰でも商社や銀行に入れた時代で、たまたま銀行に入った。知的な組織かと思っていたが、どちらかというと体育会系で、みんな朝から「頑張ろう」と声をそろえて動くわけです。これはちょっと違うなと。自分が意見を言っても余り意味がなく、入社１年でやめました。大学院でも行こうと思ってゼミの先生に電話をしたら成績が悪いからダメと言われ、あちこち求人広告に応募したがこれもダメ。そうこうするうちに４か月も経ってしまい、ここは何か国家試験でも受けるしかないなと。そこで手ごろなのは税理士、弁理士、司法書士かなと思ったが、どれも実務科目があって難しい。でも司法試験だけは座学・独学でも本だけ読めば合格できる、これならできると気付いて、初めて六法を開いた。受験中はアパートを出るのは銭湯に行く日曜日だけ。半年前に結婚した妻に弁当を作ってもらって本を読むだけ、彼女が薬局の仕事から帰ってくると夕飯を食べて、また本を読む、この繰り返しだった。本が好きなので苦痛は感じなかった。

小原　先生の頃は、合格率は物凄く低かったと思いますが。

山浦　３％ぐらいかな。スタートから論文試験まで１年しかなく、大学４年分を独学でやるので、民法は不法行為まで勉強する時間がなかった。家族法も読まないで試験を受けた。でも、前の晩にジュリストをパラパラ見てたら、日常家事債務と表見代理の判例に目がとまり、そこが試験に出た。

小原　どんな修習生でしたか。

山浦　仲間は独身が多く、皆さん我が世の春が到来し、青春を謳歌している感じだったが、私は大学４年間は自由を楽しみ、その後サラリーマン失格、ヒモみたいな生活だったから研修所からもらった

給与は全部妻に渡し、仲間と連れ立って遊ぶことはしなかった。試験の成績は良くても独学のためハンディがあったから、湯島では本格的に法律を勉強する気になった。科目では、民裁が好きだった。26期からブロックダイアグラムが使われ興味がわき、実務修習で武藤春光部長から所有権喪失の抗弁の説明を受けたときの興奮は未だにはっきり覚えています。

小原　修習を終って弁護士になられたときの事務所はどちらでしたか。

山浦　若い弁護士が大勢いて、色々な事件を扱う事務所で働きたいと考え、元日弁連会長の阿部三郎事務所に入れてもらった。大型倒産や企業法務などから、田んぼのあぜ道や庭先の花壇の揉め事のような小さな案件まで、いろいろな事件をやった。

小原　先生はそこに何年おられたのでしょうか。

山浦　約10年で、その間に所付を４年間やりました。問題・参考起案・講義メモを作る仕事で、独学の私にはとても良い勉強になった。事務所にいるよりも研修所の方が圧倒的に多かったが、阿部先生は笑いながら、海外留学に行っているようだと非常に寛容でした。事務所の仕事について、私はチームプレーが不得手でした。チームで事件をすると、自分の判断や法律家としての良心と違ったベクトルでの事件処理が必要となることがあり、「やりたくない。私の考え方と合わない、私はこの結論は反対です」ということで、ボスと何回か対立して、こういう仕事を続けるのはどうかなという気がしました。また、お金のあるなしで人を評価する銀行がイヤで辞めたのに、企業法務の仕事もそれに近いところがあるんですよね。市民のために身を粉にして働く「お気の毒な弁護士」を志していたのに、いつの間にか、腕を買われた弁護士が企業の儲けから分け前をもらうような気分で、私の人生これで良いのかな……と考えて独立する道を選びました。

小原　それからマチ弁になられ、普通の市民の相談に乗ったり。

山浦　ええ、自分の考えを大切にしました。

小原　そういうお考えの先生が、今度は司法研修所の教官になられます。これをお引き受けになったいきさつを教えていただけますか。

山浦　私は、先輩からいろいろ指導を受けたので、時期が来たら、今度は後輩に伝える立場にあり、当然教官になるべきだと思っておりました。一人弁護士の事務所では文献だけが頼りでしたが、法廷に行くとベテランの裁判官が目の前におり、民訴法や要件事実の勉強ができる絶好のチャンスでした。裁判官から厳しい注意、激励さらには誉め言葉も戴いた。法廷で法曹としての生き方や心構えまで指導してもらった弁護士は、あまりいないのではないかと思う。訴訟法や要件事実が好きでしたから、無口で人と話をするのが苦手な性格でも、法廷なら不思議と裁判官と話ができるようになり、法廷は裁判官と弁護士が戦う場所ではなく、互いに協力して患者の救命手術をする集中治療室だと考えるようになった。「弁護士と裁判官の間を自由に行き来できる弁護士」と言われたこともある。日頃から事件を丁寧にやることで、裁判官から真面目な弁護士という評価を受けたようです。かつての弁護教官は経験談をしゃべればいいみたいなところがあったが、裁判官

と法廷で対話ができる弁護士が教官になるべきだと思って、手を挙げたのです。

小原　同僚として裁判官、検察官と一緒に仕事ができるというのは物凄く意味があると思います。

山浦　教官がそれぞれ持ち味を生かして、法曹養成にあたるのは重要ですね。

小原　最高裁の裁判官に就任なさったきっかけをお聞かせください。

山浦　最高裁のことは全く関心がなく、締切りの前夜、東弁では立候補者が一人もいないと聞き、「もったいない」と思って手を挙げただけなのです。派閥に相談したら、今年は適任者がいないということで結論が出ていますから、今さら先生が出てもだめです、勝手に自分でやってくださいと。仕方ないので、７人推薦があれば審査を始めると聞き、あわてて一晩で推薦をかき集め翌日、立候補しました。あとで妻に事務所を畳むかも…と言うと「あなたは勝手ね、依頼者や従業員はどうするの」と批判的な意見だった。お客さんに、立候補したと話をしたら大笑いされた。東大でない、成績はダメ、サラリーマン失格、大学院に行ってない、留学経験もない、大事務所でもない、著名事件もやっていない、お金もない、何もない。何で手を挙げたの、あんたどうしたのと言われました。言われればそうだな、あり得ないなと。

小原　弁護士の仕事には、色々な可能性がありますね。

山浦　我々は事件をやっているんじゃないんですよ。事件は一つの現象でしかない。おできができると治せばいいと思うけど、それを治しても、また違うところにできるかもしれない。症状がでるのは原因があるからで、その原因を取り除く、生活それ自体を変えないとだめなんです。我々は事件を通じて人を治しているんですよ。ですから一度、相談を受けた依頼者との関係は一生続く、そういう意識がなければ仕事なんてできません。

小原　全ての弁護士がそういう気持ちで仕事をしてくれればいいんですけれども。

山浦　いや、むしろそういうことを実現することができる職業が弁護士なのです。

　むかしアパートの明渡しを頼まれました。アル中のおじいさんがその部屋で生活していて、他に移ってもらうまでに２年ぐらいかかりました。明渡裁判をやれば勝てるんだけど、アル中のおじいさんの生活もちゃんと見てあげなきゃいけないし、アパートのオーナーと両方を見ながら解決しました。それから20年ぐらいたったある晩のことです。警察から電話が入りました。自動車の追突事故で老夫婦が亡くなった、車のボックスを調べたら電話帳の一番最初に弁護士の山浦さんの電話番号が書いてあったと。あのアパートのオーナーだったんです。むかし小さな事件をやったことだけで、その人は私を覚えていたんです。20年の間に電話帳は何回か書き換えますよね、それでも書き換えのたびに一番上に書いていたのです。私はもう忘れていたけど、この方は「何かあったらこの弁護士に相談しよう」と心に決めていたんです。亡くなった老夫婦が遠くから私に依頼をしてきたと感じ、丁寧にその後の手続を進めました。こういう経験をするとマチ弁の楽しさが分かると思います。

小原　最後に、若手も含めて、弁護士に一番大切なことは何か、メッセージをお願いします。

山浦　人生には幾らでもチャンスがあり、そのときに手を挙げるとか一歩又は半歩でいいから前へ出ることです。新しい世界が広がります。後になってあのときがチャンスだったと気づいても、もう遅いんです。

小原　本日は、本当にありがとうございました。

山浦　こちらこそありがとうございました。

（Interviewer: 小原正敏
Photo: 髙廣信之）